

## 幼稚園の日常生活の中で保育者が育つには

○田辺紀恵 上田雪江 —日々の記録の中で考える—  
(小鳩幼稚園)

### <はじめに>

幼稚園の日常生活の中で、子どもたちが自分の思いや考えを充分發揮して遊んでほしいと願い、毎日の保育後、話し合いをもっている。

その話し合いの内容は、子どもの活動が主である。保育者は、それを他の保育場面で判断して対応したことを話し、その意味を明らかにしていくようになった。このようなことを毎日積み重ねていくことが、子どもと保育者が共に育っていくことにつながると考える。

そこで、日々の記録から例をあげて、何が、どこで、どう育っているのか、又育っていくのかを述べる。

### <①お弁当についての話し合い>

お弁当を食べる時、保育者が子どもに、行儀よくすること、残さないこと、しゃべらないこと等子どもたちに言い聞かせることが多い。

そして、子どもが保育者の言うことを聞かない場合、保育者は困り、このことを問題にして、保育後の話し合いになる。

事例(1) 1986年11月 (年少児)

(⑦……保育者)

⑦F 「きょうもですが、H男がいつもきちんと座って食べないんですね。ご飯を箸でつづついて又立ち歩く。本気で食べないので、どうしたらよいかわかりません」

⑦u 「なぜ、きちんと座って食べないといけないのかな?」

⑦F 「.....」

⑦uは、⑦Fの問いに考えている。

⑦u 「子どもが、きちんと食べることに問題点を置いているようだけれど、今までに保育者であるあなたが、食事をすることの意味について考えたことがあるかな」

⑦F 「うーん、そんなことは改めて考えたことはないです」

⑦u 「それならば子どもに、『きちんと食べなさい』『残さないように』ということの意味は何なんかしら。そのところを少し時間をかけて、みんなで考えてみよう」

しばらくの間、みんなが考えていた。

そして、それぞれの意見が出た。

⑦u 「食事をすることは当たり前と思っていたし、自分の親から、きちんと行儀よく食べなさいと言われてきたので、自分もそうしていると思う」

⑦k 「小さい時から、食事を家族みんなでしたことはあまりない。ひとりで食べることが多かったので、食事のことについて考えたことはない」

⑦T 「勤めはじめは、食事のことについて考えたことはなかったが、子どもと一緒にお弁当を食べているうちに、ひとりひとりの食事が違うことに気が付いた」

⑦u 「どんなことが違うか、具体的にあげてみよう」

⑦T 「食べる分量、食べる時間、お弁当の中味、どんな場所で食べているか、食べる意欲(その日その日に、食事のむらがある)、食べる時の仲間はどうか等がある」

⑦u 「この違いを保育者は、どのように受けとめていくことが大切なのかを考えてみよう」

これから2時間位、話し合いは続いた。

子どもは同じ年齢であっても、体格や発育によって食べる分量・速さが当然違う。

そのことを、考慮していくなければならない。

又、食事を途中で残す子どもがいれば、残すことが悪いとするのではなく、なぜ残そうとするのかがわかるこの方に意味がある。例えば、体の調子の悪い時や味付の方に問題がある時もある。

ある日、「先生、この魚辛いけえ」、「へえー、そんなに辛いの?お母さんに、今日の魚辛かったよ」と言ったら、「うん、そうする」と言って、その魚を残したことがある。

辛いおかずを、せ、かくお母さんが入れてくれたのだからと、無理をして食べさせようとすることよりも、食べて感じたことを表現できることが、次の食事を作ることにおいても、子どもに合ったところのものになっていく。

又子どもたちが、お弁当を食べることを楽しみとする中に、食べたい場所を自分で選ぶことにもある。

その日、充分満足して遊んだ箱積木の家の中で食べた

り、天気の良い日は、外にごさやテーブルを出して食べたり、時には高い所を見つけ、チャイルドハウスの屋根で食べることもある。その時は非常に満足気であり、自分で食べようとして食べている様子がうかがえる。このようなことを考えると、食事は待ち遠しいものになったり、楽しいものであったり、満足感のあるものとなる。

保育者自身が、日常食事というものをどう心得て生活しているかが、子どもと生活する上に大きく反映してくるものと思われる。

### 〈②子どもからあやとりを教えてもらう保育者〉

事例(2) 1986年 12月 (年長児)  
(①……保育者)

あやとりをしているK男が、①のところにやって来て、

K男 「先生、富士山の作り方知っている?」

① 「知らないけれど、K男ちゃん知っているの」

K男 「うん、知っちゃるよ。本にあったから覚えた」

① 「ふーん、よくわかったね」

と言って、①は自分の仕事があったので、その場を去ろうとした。

K男 「先生 教えてあげる」

と言うなり、①が使うあやとりの紐を取りに行ってくれたので、教えてもらう気持になった。

最初は、すぐに終わるだろうと軽い気持ちで立ったまま教えてもらっていたが、そのうちにどうもややこしくなって、いつのまにかどっかり座って、自分が本気になっていた。

K男 「先生あのね、ここをはずして 次にこれをとるんよ」

と、しかも自分が先にやってみせるのではなく、①のやっているあやとりの紐で示してくれるるのである。

K男 「ここまでわかった?」

と聞くが、①はよくわからないのですぐ返事が出来なかつた。

K男は、①がよくわからぬことに気が付いて、

K男 「先生、もう一回はじめから教えてあげる」と、とても優しく言ってくれる。実にいい気持ちで、子どもから教えてもらっている自分である。

子どもと先生の関係でなくなつて、人間のつきあいになっているのである。出来なければ、もう一度最初から教えてくれるというのである。保育者が、子どもに何かを教えようとする時、こんなにいい雰囲気で、丁

寧に、親切に教えられることはあまりないような気がする。保育者は、指導する気持が前に出ていることを反省し、このあやとりをした時の気持になることを子どもから学び得たのである。

### 〈③子どもの教材を通しての研究心〉

子どもたちは、さまざまな活動をする中で、絵を描くことも好きである。それにかかる紙、クレパス、絵の具等、画材を使って、子どもは絵を描くのであるが、その場合保育者は、子どもがどんな絵を描いたかどんな過程で描いたのかを知ることに意味があると考えていた。

1985年6月、美術の専門の先生を招いて園内研究をもつた。

先生は、各クラスにある紙、絵の具、筆、鉛筆、土粘土を手で触れ、目で確かめられ、保育後の話し合いの折、「この園は、教材にお金がかかるわたりに、質的にはよくない……無駄が多い」等の指摘を受けた。そこでまず、今使っている画材について、質の良い画材とはどんなものかを学んだ。

その画材を使って描いている子ども達のグループがあることを知らされ、数日後、保育者全員でアーティストと称するところへ出かけた。

そこで描いている子どもたちは、音楽を聞きながら自分の題材に向かって描いている。

透明感のある絵の具、混色した色には目をみはるものがあった。

保育者が、自分達も描いてみたい気持になり、保育者ひとりひとりが画材を揃えて、混色から始めた。

保育者が描いた喜びから、子どもにも使ってほしいという願いが生まれ、使用することに決まった。

以上のことから、保育者が教材を求める時、何を基準にして選べばよいか、子どもが使っているものを日々検討し、学んでいかなければならぬことがわかる。

### 〈おわりに〉

保育者は、幼稚園の日常生活の中で、・保育者仲間の話し合いから、子どもとの関わりの中から、又専門研究者より専門的な見方等から、物の考え方や判断していく上の基準を、学ぶことができる。

保育者は、学び得たことを日々の保育場面に生かし、今後さらに、さまざまな活動を検討しながら、意味を明らかにしていく。